

偉人の足跡

蕪里を歩く

瑛探訪

— 65 —

蕪里区は、大谷中・小舟内・戸々堀・蕪戸田・沖田・後場の6つの集落から成り立っています。田園風景の中で、集落全体からゆったりとした印象が感じられるのは、

およそ400年前に蕪里村ができた当初から支配者が1人でまとまっていたためでしょう。江戸時代には村内の沼地が干拓され新田が増えました。が、それらは代官の領地となり、民家はできませんでした。1845年ごろの村の家数は77軒。村内が「上蕪里村」と「下蕪里村」に分かれていたように、石仏などにそうし

た村名が刻まれています。

昭和50年代に始められた地域の歴史調査で、偉人ともいえる人の足跡が明らかになりました。

蕪里村の名主だった大木幸太夫は、200年ほど前の文人墨客との交流や活動が知られるところとなりました。幸太夫は、俳諧を学び、仙台・松島瑞巖寺や成田山新勝寺に芭蕉の句碑を建てました。また、1791年に俳人・小林一茶が蕪里の大木家に泊まり、句を詠んだことも知られています。

幸太夫は、自宅に来泊した

文人との交わりを伝える一冊の分厚い帳面『松風庵客名録』を残し、「房総俳壇史全体から見ても先達の一人と称すべき人物である。」と評価されています。

幕末から明治にかけて蕪里村

田園に建つハリストス正教会



で私塾を開いていた山崎天遊の「澄山書院」に、同村の鶴沢修が須賀正教会を設けたのが1889年(明治22年)でした。

幕末にロシア人修道司祭ニコライが来日し、宣教活動を進めた日本ハリストス正教会が千葉県下で布教を始めたのは、1870年代後半からとされています。ニコライは、1892年(同25年)新しく完成した蕪里の教会を訪れ「聖母福音教会」と名付けたとされています。

鶴沢の郷里を中心とした伝教により、当初8人だった信者も、1919年(大正8年)には484人を数えたといます。

昭和49年に県の文化財に指定された、山下りんの描いた聖画(イコン)は1899年(明治32年)に神田のニコライ大主教から贈られたものです。東京―銚子間に鉄道が開通した2年後のことで、聖画を横芝駅から牛車で運んだエピソードが伝わっています。蕪里に生まれ、生きた大木幸太夫、山崎天遊、鶴沢修らの足跡を今後も伝えたいものです。

問 秘書課広報広聴班

☎ 73・0080